

現代社会に生きる私たちと西欧の歴史

—European history for today: What can we learn from the past?—

社会科教育・森 貴子

1. 講義の概要

2013 年度後期・金曜日 4 限開講の外国史 I は、二回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。登録者数は 38 名であった。

西洋史分野（外国史 I・II・III）では例年最も多くの、かつ多様なコース・専修の学生が履修する本講義だが、試験の結果から判断すると、理解度が低くなってきているように感じる。そこで昨年度に引き続き、本講義を評価対象とし、改善すべき点を探りたい。

(1) 講義の目的

本講義は、現代社会の様々な問題を、資本主義の生まれた西欧を場として歴史的・長期的観点から捉え直させ、今という時代がどんな時代であるのかという「歴史感覚」を身につけさせることを目的としている。また、中学校社会科や高校地歴の教員を目指す学生が多く受講するため、中世から近現代について最低限必要とされる西洋史の知識を獲得させたいという思いもある。

具体的な目標としては、中世から近代の歴史を、人類の生活形態、社会経済様式などに注目しつつ概観することで、資本主義成立以前と以後で生活がいかに変化し、そこにどのような問題が存在するかについて、理解させることを目指した。

(2) 講義の詳細

授業は、基本的に、講義形式で行われた。『あなたが歴史と出会うとき』（堺 憲一著、名古屋大学出版会、1989 年）を主なテキストとしつつも、そこに独自の内容を織り込みながら中世農村から近代資本主義社会までを概観し、現代社会との関連で問題を整理した。扱った内容は、主として、荘園制（領主＝農民関係／農村共同体／農業制度）、中世都市（都市共同体と自治／ギルド）、大航海時代（覇権の変遷とその要因）、農村工業とその展開、資本主義的精神の成長、そして産業革命とその功罪である。

学生に対しては、テキストについて、各回の授業で扱う範囲を事前に読み込み、自分なりの理解をしておくことを要求した。また、各回の内容に沿った史資料を可能な限り準備して、学生による理解を手助けすると同時に、ビデオなどの映像資料も利用して、各々の時代をイメージしやすいよう工夫した。取り扱う内容については、各々のテーマをめぐる最近の研究動向に触れながら、歴史解釈は不変ではないこと、テキストはある特定の視点からの叙述であることを強調しているが、今年度はさらに高校教科書にも触れ、そこでの記述がどのような立場から、どのような論争を背景におきながらなされているか、教科書の読み方についても注意を向けさせるよう努めた。

2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした（2014 年 2 月 14 日実施）。受講登録者 38 人中、アンケート回答者は 34 名（社会科教育二回生 11 名／人間社会デザインコース二回生 8 名・四回生 2 名／教育心理学 2 回生 3 名／教育学二回生 2 名・三回生 3 名／造形芸術コース二回生 1 名／技術教育三回生 1 名／国語専修 2 回生 1 名／所属不明 2 名）であった。

◎ 問 1～9 は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

5：強くそう思う（非常に良い）

4：ややそう思う（良い）

3：どちらとも言えない（普通）

2：あまりそう思わない（あまり良くない）

1：全くそう思わない（良くない）

<問い>

問 1 この授業への出席状況は

問 2 授業のテーマ・目的は、明確でしたか

- 問3 担当教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか
- 問4 担当教員は重要な点を適切に説明しましたか
- 問5 板書は見やすかったですか
- 問6 配付資料は有用でしたか
- 問7 授業に対する教員の熱意・工夫が感じられましたか
- 問8 授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか
- 問9 授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	20	10	3	1	0
問2	15	18	1	0	0
問3	26	7	1	0	0
問4	21	13	0	0	0
問5	17	7	5	4	1
問6	10	16	5	2	1
問7	22	11	0	0	1
問8	14	15	5	0	0
問9	18	12	4	0	0

*問1～9に対するコメント

- 問3：自分たちに話しかけるような授業でよかった／自分たちへの配慮が強く感じられた／少し早かった
- 問4：必要なこと、知っておいてほしいところが分かりやすかった
- 問5：見やすい、分かりやすい／書く量が多い／大事な箇所はマーキングしてほしい
- 問6：地図や具体例がよかった／特に使う場面がなかった
- 問7：プリントやビデオなど工夫されていた
- 問8：講義内容は理解できた／世界史は不得意
- 問9：前近代から近代への変化を多角的に見ることができ、有意義だった

◎ 問10、11は記述式で解答を求めた。以下、紙幅の制約上、内容を整理して取り上げる。

問10 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

ヨーロッパの前近代・近代について、ビデオを見たりしながら学べたことで、理解が深まった／板書がきれい、多い、整理されていて

わかりやすい（複数回答）／資料やテキストにそって授業が進んだ点。あわせて学ぶことで理解が深まった（複数回答）／ビデオやカラーの配布資料がよい（複数回答）／過去の経済形態から現代に至るまでをわかりやすく辿れて、スムーズに理解できた／テキストが読みやすい／詳しい説明／板書をしっかり書くことで集中できた／テストが論述だったので、復習や内容の整理によって、理解がより深まった／中世の都市の衛生状態や暮らしぶりに興味がわいた／産業革命や資本主義の影響を深く学ぶことができた／日本史ばかりではなく世界史に目を向けることで、幅広い見方や考え方ができる

問11 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

板書が早い／板書の量が多い／回によっては授業のスピードがとても速い時があり、しっかり理解できない時があった／むしろこのような進め方でほかの外国史の授業を受けたい／受講者がノートを工夫する必要がある／板書よりレジュメを配布してくれた方がいい／板書を書き写すのは無駄な労力と感じた

3. コメント

－授業の達成度・今後の課題－

学生による五段階評価およびコメントからは、近代化の過程とその背景を大枠で把握するという外国史Iの目的は、ある程度は達成できたと思う。ただし、「わかりやすい」とのコメントの持つ両義性には注意しなければならない（「授業の詳細」で述べた、歴史叙述をめぐる問題一問いのたて方・解釈をめぐる論争の存在、歴史的事実の取捨選択への意識が低い可能性がある）。

また、板書や配布資料についての評価は総じて高いが、学生の一人が「資料を使う場面がなかった」と回答している点が気になる。これが授業にうまく参加できない学生の存在を示すとしたら、ほかにどのような手だてを講じていくべきか。板書については「板書のおかげで集中できた」という立場が多いが、なかには拒否反応を示すものもいる（「無駄な労力」）。学生の多様化については常日頃実感しているところではあるが、講義で扱う内容を限定し、板書の量を減らす、進行速度を落とすなど、新たな工夫が必要なのだろう。